

戦時下の原民喜

— それぞれの一二月八日 —

1

原民喜の対社会意識についての考察は、それほどなされているわけではない。社会意識というものがいささか大仰に過ぎるとすれば、原民喜がかれの生きた時代をどのように見つめ、どのようにとらえていたのか、と言いかえてもよい。もともと、原民喜はもともと寡黙で内向的な詩人・作家であり、社会的視野に立った発言もさして多くはない。その唯一の例外が戦争・原爆に関する一連の文章（『『狂気について』』など』昭和24・7、『戦争について』昭和23・9、など）である。

一九四五（昭和二〇）年八月六日およびその後の原民喜についてはすでに多くの言及がある。が、アジア太平洋戦争時の原民喜の精神あるいは内面のドラマについてはそれほどふれられているわけではない。わたしは、原民喜の対社会意識について考察する手がかりとして、原民喜がアジア太平洋戦争をどのようにむかえ、戦時下をどのように過ごしたのか、といった点について、『美しき死の岸に』と題してまとめられた短編連作を通して考えていきたいと思う。

一九四九（昭和二四）年二月、能楽書林より『ざくろ文庫』の一冊

岩崎 文人

として刊行された小説集『夏の花』の奥付には、簡単な著者略歴につづけて、著書として『小説集『死と夢』（未刊） 小説集『忘れがたみ』（未刊）』とある。いずれも、一九五一（昭和二六）年三月一三日の原民喜の自死によつて生前刊行されることはなかった。生前原民喜自身が分類整理していたものに基づいて編集刊行された角川書店版作品集第一巻（昭和28・3）には、『死と夢』と題された連作一〇編が収められているが、作品集に『忘れがたみ』を総題とするものはない。ただ、同じ角川書店版作品集第二巻（同）に、短編『忘れがたみ』を含む連作一四編が同じく原民喜じしんの手によつて『美しき死の岸に』としてまとめられたものが所収されている。これは、『夏の花』出版時、『死と夢』を幼少年期を題材にした創作集、『忘れがたみ』を妻貞恵を鎮魂する作品集として刊行しようとする意図があったものの、けつきよく、『夏の花』刊行後に発表された貞恵に関する文章六編を加え、『美しき死の岸に』としてまとめたものである。『忘れがたみ』にかかわると推測されるものに、次のような言及（『死と愛と孤独』昭和24・4）がある。

嘗て私は死と夢の念想にとらはれ幻想風な作品や幼年時代の

追憶を描いてゐた。その頃私の書くものは殆ど誰からも顧みられなかつたのだが、ただ一人、その貧しい作品をまるで狂気の如く熱愛してくれた妻がゐた。その後私は妻と死別れると、やがて広島の惨劇にあつた。うちつづく悲劇のなかで私と私の文学を支へてゐてくれたのは、あの妻の記憶であつたかもしれない。そのことも私は「忘れがたみ」として一冊は書き残したい。

短編連作「美しき死の岸に」所収の作品のうちもつとも早い発表は、「忘れがたみ」（昭和21・3）であり、生前発表の最後のものは「美しき死の岸に」（昭和25・4）である。これらに遺稿となつた「死のなかの風景」（昭和26・5）、「心願の国」（同）二編が加わっている。

原民喜が広島県豊田郡本郷町（現・三原市）の、評論家佐々木基一の姉永井貞恵と結婚したのは、一九三三（昭和八）年三月のことであり、貞恵の死は、一九四四（昭和一九）年九月のことである。この間の出来事を軸にして短編連作「美しき死の岸に」は成立しているが、一九三三年といえ、その年の二月、小林多喜二が検挙後、築地署で虐殺され、三月には、日本が国際連盟を脱退し、国際的に孤立化していった年であり、一九四四年といえ、言うまでもなく、敗戦の一年前のことである。つまり、原民喜と貞恵の一〇年余という短い結婚生活は、昭和史の暗い歳月とそのまま重なり、とくに、貞恵の闘病生活はアジア太平洋戦争期と重なる。

2

ところで、「美しき死の岸に」連作一四編のなかで、年月日時分が記されている箇所が一例だけある。それは、入院闘病中の妻貞恵が手帳にしたためていた遺言状の第一頁、マタイ伝の一節が引かれたあとに書かれている「昭和十九年三月二十九日午後八時四十分」（「忘れがたみ」に所収の「手帳」）である。これは妻貞恵が記述していたものの引用であるので別格として、「昭和八年の暮」、「昭和十一年のはじめ」、「昭和十三年の頃」などの年号の記述はいくつか散見できるが、月日が明確に記されている箇所は二箇所のみである。その一つは次のようなものである。

ある朝（それは昭和十四年九月十日のことであつた）私はまだ床にゐて、よく目も覚めきらなかつたが、とくに起出してごそこそやつてゐる妻のけはひを隣室に感じてゐるうち、ふと、かすかな、せつなげな、絶え入るばかりの咳の声を聞いた。私は寝巻のまま飛出して隣室に行つてみた。妻はぐつたりとして、かすかに笑顔をされた。それはたつた今生じたことを容易に信じかねるやうな、稍うはずつて美しい顔であつた。だがこれが我々の身の上を訪れた最初の霹靂であつた。（「忘れがたみ」）

「忘れがたみ」は貞恵を追慕する二〇の断章（「飛行機雲」から「門」まで）よりなるが、そのうちの「ある朝」と題する一文の一節で、妻貞恵が最初に咯血した朝を描出したものである。なお、この咯血の場面は、おなじく「美しき死の岸に」に所収されている「苦しく美しき

夏（昭和24・6）で繰り返し書かれることになる。

さうした、ある朝、彼は寢床で、隣室にゐる妻がふと哀しげな咳をつづけてゐるのを聞いた。何か絶え入るばかりの心細さが、彼を寢床から跳ね起させた。はじめて視るその血塊は美しい色をしてゐた。それは眼のなかで燃えるやうにおもへた。妻はぐつたりしてゐたが、悲痛に堪へようとする顔が初々しく、うはづつてゐた。妻はむしろ気軽とも思へる位の調子で入院の準備をしたら。悲痛に打ちのめされてゐたのは彼の方であつたかもしれない。妻のみなくなつた部屋で、彼はがくと蹲まり茫然としてゐた。世界は彼の頭上で裂けて割れたやうだつた。やがて裂けて割れたものに壮烈が突立つてゐた。

のち、貞恵は糖尿病を併発し、千葉医科大学付属病院（現・千葉大学医学部付属病院）で入院生活を送ることになる。とくに言挙げする必要もないが、原民喜にとって、「昭和十四年九月十日」は、まぎれもなく、特別の日であつたのである。

もう一箇所は、次に上げるものである。

……それから間もなく、あの恐ろしい朝（十二月八日）がやつて来たのだつた。気を滅入らず氷雨が朝から音もなく降りつづいてゐて、開け放たれた窓の外まで、まるで夕暮のやうに惨憺としてゐたが、ふと近所のラジオのただならぬ調子が彼の耳朶にピンと来た。スイッチを入れてみると、忽ち狂ほしげな軍歌や興奮の

声が轟々と室内を掻き乱した。彼は惘然として、息を潜め、それから氷のやうなものが背筋を貫いて走るのを感じた。過酷な冬が来る。恐しい日は始まつたのだ。（「冬日記」昭和21・9）

「十二月八日」は、言うまでもなく一九四一（昭和一六）年二月八日のことである。その日、日本時間午前二時、日本軍はマレー半島に上陸を開始し、同三時、ハワイ真珠湾空襲を開始、米戦艦主力を撃破した。二月二日、閣議によつて大東亜戦争（アジア太平洋戦争）と命名された、一九四五（昭和二〇）年八月一五日の敗戦により終結する悲惨な戦争の発端の日である。

原民喜が迎えた二月八日を新聞記事（『東京日日新聞夕刊』昭和16・12・9、『昭和ニュース辞典第七卷』平成6・6、による。引用は原文のまま）によつて再現すれば、次のようになる。

いつもの朗らかな朝のラジオ体操のメロディに代わつて、八日朝のラジオは歴史的な重大ニュースを聴取者たちに送つた。午前七時、同十八分、同四十一分、八時三十分……とひっきりなしに、

「大本営陸海軍部発表」

と緊張した放送員の声が朝の食膳におくられ、また出勤途次のサラリーマンの耳を打つた。

「いよいよ始まつた！」

決意はきまつていても、国民の感慨はまた新しいものがある。「スイッチは切らないでそのままお待ち下さい」——緊張の連続である。ニュースとニュースをつなぐ音盤放送も「軍艦マーチ」

「愛国行進曲」など勇ましいメロディばかり、一億国民の士気はいやが上にも鼓舞された。

(略)

沸き上がる万歳の乱発 開戦の詔書が渙発された八日昼の本社は、次々に貼り出される特報に群衆が去りもやらぬ混雑振り、青バス、市バスも立ち往生の雑踏だが、誰の表情も隠忍に隠忍を重ねた国民的鬱積がこのハワイの爆撃行となったかのよう、「我慢していれば良い気分になって……日本の兵隊は英米のチヨコレート軍隊と違うんだ」と口々から洩れる。突然群集の中から国民服の一人が躍り出て、「皆さん、戦捷を祝して万歳を三唱したいと思います」と唱導、万歳万歳の声は小春日和の有楽町界隈に轟き渡った。

いささか引用が長くなったが、一九四一（昭和一六）年二月八日の真珠湾攻撃を伝える報道とそれを聴いた一般国民のありようは、おおよそ引用の通りであったと思われる。が、原民喜は、「大本営陸海軍部発表」を伝えるアナウンサーの声を「室内を掻き乱す「興奮の聲」と記述し、ニュースとニュースの間に流れる「軍艦マーチ」や「愛国行進曲」を「狂ほしげな軍歌」と距離を置き、「惘然として、息を潜め、それから氷のやうなものが背筋を貫いて走るのを感じた。過酷な冬が来る。恐しい日は始まったのだ」と記すが、アジア太平洋戦争開始時のこうした感慨は、おそらく、当時の国民の一般からは、はるかに遠いものであったに違いない。原民喜は、当時の熱狂から遠い位置におり、時代の動向を客観的に予見した数少ない文学者のひとりであ

った、といつてよい。

たとえば、『春の城』（昭和27・7）、『魔の遺産』（昭和29・3）などで知られる広島市出身の阿川弘之は、次のような文章（『文藝春秋』平成21・3）を書いている。

北さんの文章に一箇所贅言を加へるなら、曇天にバツと日が射したやうに感じたのは、実のところ「一部の人」だけではない。私は、大学の国文科生だった自分が、「此の戦争には自分も何かをしよう。命を捨てることになるかも知れないが仕方が無い」、支那事変の鬱陶しさが晴れ上る思ひでさう考へたのをはつきり覚えてゐる。緒戦時、学生も学者も各界一流の芸術家もひつくるめて日本人の大多数が、先進国米英に対する軍の戦果の大きさに感動し、進んで戦争協力の姿勢を見せたのは、ごく自然な成り行きであつた。（阿川弘之「日米戦争と茂吉」）

「北さんの文章」というのは、阿川弘之の友人北杜夫の『茂吉彷徨』（平成8・3）のことである。そのなかで、北杜夫は、日米開戦の日、二月八日朝の父茂吉のことについて記しているが、それによると、茂吉は、学校へ出かけようとしていた杜夫のところへ、二階から足音高く降りてきて、「始まったぞ。アメリカと始まったぞ！」と興奮した声で告げ、その日の日記には、「老生ノ紅血躍動！」と書いている、という。これにつづけて中学二年生であつた北杜夫は、「一般民衆は転落に向う祖国の状勢をとでも判断できるものではなかった」、「それゆえ開戦の日に一部の人が、『曇天にバツと日が射したかのよ

う』と感じたのも無理ではなかった」と記す。阿川は、これを受けて、「曇天にバツと日が射したやうに」、「支那事変の鬱陶しさが晴れ上ったように感じたのは、実は国民の大多数であったと書き加えているのである。

その内実はここでは措くとして、「皇軍」頌歌を主とする「聖戦」詠を多くものした斎藤茂吉の例から話を進めることが恣意的に過ぎるという誹りを受けるとすれば、他の例をもあげておく必要があるう。

(略)当日の八日、米英に対して聖なる宣戦が布告されたのだつた。この開戦はびつくりしたり、驚愕の念を抱かせられたものではなく、かくあるべきことが鮮明に具体化されたのだつた。八日は新聞やラジオにくつついてゆき、涙を流し、眼ざめるやうな思ひがし、新鮮な焰を感じた。

(大田洋子「十二月八日の夜」、『暁は美しく』昭和18・3、所収)

広島市白島九軒町で被爆し、『屍の街』(昭和23・11)を発表することになる大田洋子の二月八日である。こうした感懐が、やはり国民の大多数であったのである。

開戦時、斎藤茂吉五九歳、大田洋子三八歳、阿川弘之二二歳。一世代若い村井志摩子の例もあげておこう。

戯曲「広島の子」(昭和58・7)で知られる村井志摩子は、一九二八(昭和三)年、呉市に生まれている(二歳の時広島市に移住)ので、開戦の時一三歳である。次の文章は、「軍国少女」(『女優の証

言』昭和58・7、所収)と題された一文で、直接二月八日当日にはふれていないが、アジア太平洋戦時下をどのように生きたかが語られている。

村井は、一九四五(昭和二〇)年八月一日、東京女子大学の講堂で、玉音放送を聞いたのち、次のように書いている。

天皇陛下の声はこんな声だったのかと、こんな話し方をする天皇を、現人神としてこの瞬間まで信じていた自分が、何かおかしかった。許せなかった。そして、それは母の裏切りへの激怒に変わっていた。

四歳から母子家庭に育った私は、母から嘘をつくことを厳しくいましめられていたからである。私は母を信じていた。

「ほしがりません、勝つまでは!」「見ざる、聞かざる、言わざる」と、子供心に不思議に感じることもあったが、これまで母に反抗することはなかった。

生きて敗戦を迎えることは、想像もしていなかったし、この聖戦は、一億玉砕の覚悟で本土決戦にそなえていた私だったからである。

一九四一(昭和一六)年二月八日開戦時の国民の思い、さらには戦時下の人々の心根はおおよそ以上のようなものであったであろう。ただし、村上菊一郎(明治四三年、三原市生まれ。仏文学者、詩人)のように、何らの感懐を記すことなくたんと事実のみを日記に記した例もある。

八日のハワイ海戦に於て戦艦アリゾナ号撃沈せること判明、米国の戦艦合計三隻撃沈したことになる。(村上菊一郎『日記』)

村上菊一郎は、一二月八日、外務書記官生としてサイゴンに赴くため、神戸港に向かうが、日記(大学ノートに記された日記・ふくやま文学館蔵)に記された真珠湾攻撃のニュースは、事実のみを記したわずか二行に過ぎない。

こうした例がないわけではないが、それにしても原民喜の例は異例である。

一九三七(昭和一二)年七月、日中戦争が開始されるが、一九四一(昭和一六)年一二月八日までの時代を、さらには敗戦までを原民喜はどのようにとらえていたのだろうか。「吾亦紅」(昭和22・3)には、「昭和十三年頃のこと」として、「何だか訳のわからない気持ちのわるいものが、外にも内にも溢れてゐた」とあるが、こうしたやや抽象的で感覚的な類縁の表現は執拗にくり返されている。たとえば、「むかむかするその頃の世相」(「吾亦紅」)、「じりじりと押迫つて来る何か不吉なもの」(「冬日記」昭和21・9)、「得態の知らない陰惨なもの」(「苦しく美しき夏」昭和24・6)、「魔物の姿」(「死のなかの風景」昭和26・5)などである。がそれだけでなく、時代の空気を象徴する具体的事象も随所に記されている。以下、戦時下のありさまを記したいいくつかをあげる。

彼は電車の中で昂然とした姿勢の軍人の顔をつくづく眺めてゐ

た。人々は強ひて昂然としてゐるらしかったが、雪に鎖された窓の外の景色は、混濁した海を控へてゐて、ひそかに暗い愁を湛へてゐるのだつた。(「冬日記」)

妻はさびしげに笑つた。だが、笑ふ妻の顔には悲痛がピンと漲つてゐた。この病院でも医者はずきづきに召集されてゐたし、津軽先生もいつまでも妻をみてくれるとは請合へなかつた。

(「秋日記」昭和22・4)

青い軍服を着た海軍士官の一隊が——彼の眼には編笠をかむつて数珠繋になつてゐる囚人の姿に見えてくる。

(「苦しく美しき夏」)

埋葬に列なつた人々は、それから兄の家に引きかへして、座敷に集まつた。「波状攻撃……」と誰かが沖繩の空襲のことを話してゐた。その酒席に暫く坐つてゐるうちに、彼はふと居耐らなくなつた。何かわからないが怒りに似たものが身に突立つてきた。

(「死の中の風景」)

人々の後について、人々の行く方へ歩いて行つた。人々が振仰ぐ方向に視線を向けると、丘の上の樹木の梢の青空の奥に、小さな銀色の鍵のやうな飛行機が音もなく象眼されてゐた。高射砲の炸裂する音が遠くで聞えた。丘にくり抜かれてゐる横穴の壕へ人々は這入つて行つた。

(「死の中の風景」)

船橋市立船橋中学校に英語嘱託講師として通う電車の中で見かけた「昂然とした姿勢の軍人」を「強ひて昂然としてゐるらし」と感じ、背後の風景に「暗い愁」を見、旅先でふと目にした「海軍士官の一隊」を「編み笠をかむつて数珠繋になつてゐる囚人の姿」と形容する書き手の内部には強烈な批評精神があるといつてよいし、医師の召集、沖縄戦、空襲を記述する民喜の精神の根幹にあるのは、「異常なもの」「来るものが来た」という「破滅」への予感であった。戦時下の原民喜をもっとも端的にうかがわせるのは、おそらく、次のような一文（戦争について「昭和23・9」であろう）。

夕食が済んで病妻が床に横はると、雨戸をおろした四辺は急に静かになる。ラジオばかりが生々しいものをその部屋に伝へてくると、それが、それを聴きながらも、つねにそれを無視しようとする気持が僕にはあつた。それは日本軍による香港入城式の録音放送を聴いてゐた時のことであつた。戦車の轟音のなかから、突然、キヤーツと叫ぶ婦人の声をきいた僕は、まるで腸に針を突刺されたやうな感覚をおぼえた。あの時、あの時から僕には、もつともつと怖しいことがらが身近かに迫るだらうとおもへた。それから、原子爆弾による地球大破滅の縮図をこの眼でたしかに見て来たのだつた。

日本軍が香港島を制圧、香港の英国軍が降伏したのは、アジア太平洋戦争の勃発した一九四一（昭和一六）年一二月八日からほどない一

二月二五日、日本軍の香港入城式が挙行されたのは同月二八日のことである。

こうした文章から帰納される原民喜という文学者の姿は、やはり貴重なものである。文芸懇話会（昭和九年結成）、出版懇話会（昭和一二年発足）、大日本言論報国会（昭和一七年設立）の時代、多くの文人文化人が、時流にのつた文章を書き、国策文学を発表していったなか、原民喜は時代の空気を鋭敏に察知し、時局に迎合しなかつた数少ない文学者のひとりであつたことはまちがいない。

ちなみに、「米英に対して聖なる宣戦が布告された」一二月八日、「涙を流し」、「新鮮な焰」を感じた大田洋子は、一九三九（昭和一四）年一月、中央公論社の知識階級総動員懸賞に応募した「海女」が創作第一席に当選し、翌四〇年一月には、時流に乗つた国策小説「桜の国」が朝日新聞懸賞に当選している。「桜の国」は、アジア太平洋戦争が勃発した一二月八日の前月一一月一日に、松竹映画大船作品（監督・渋谷実、脚色・池田忠雄、津路嘉郎、配役・高峰秀子・笠智衆・上原謙ほか）として封切られている。

3

が、私は手放して原民喜という文学者を称揚するつもりはない。短編連作「美しき死の岸に」におけるこうした原民喜の社会認識がどれほど有効であるのか、あるいはまた、社会的広がりやどれほど持っているのか、といった疑問、批判も当然生じてくる。原民喜という文学者の文学的資質―抒情性―の問題も浮上して来るであろう。たしかに

原民喜は、「旗行列の準備で学校中が沸騰してゐる時も、彼はひとり教員室に残りぼんやりと異端者の位置にゐた」（『冬日記』）という一文に象徴されるように、時流と距離を置く異端者に過ぎなかつた、ともいえる。このことに関しては、原民喜もじゅうぶん自覚的であつた、といつてよい。原民喜じしん「外部の世界と殆ど何の接触もなく静かに月日を送つてゐることは、却つて鋭い不安を掻きたててゐた」（『苦しく美しき夏』）と自省するように、短編連作「美しき死の岸に」から浮き彫りされる原民喜は、あくまでも〈個〉としての、限られた世界での批評性、批判性を有しているに過ぎず、社会的広がりへの拠点としての〈個〉ではなかつた。

しかしそれは、必ずしも作品の優劣にかかわるものではなく、短編連作「美しき死の岸に」という作品、妻を追慕する鎮魂歌としての作品が必然的に要求する方法上の問題でもある。原民喜は、「もし妻と死別したら」「悲しい美しい一冊の詩集を書き残すために」「一年間だけ生き残らう」（『遙かな旅』）と考へた抒情詩人であつたのだ。

この作品の基本的性格は、亡くなつた妻貞恵「お前」に対する呼びかけ―対話―によつて成立しているのである。短編連作「美しき死の岸に」は、おそらく清岡卓行の「朝の悲しみ」（昭和44・5）とともに喪つた妻の回想記、鎮魂歌として最高のもので、とわたしは思う。

原民喜がより広がりのある〈個〉、社会化された〈個〉としての「私」の視点で書いたのは、『夏の花』（昭和22・6）である。これもまた、『夏の花』という作品が要請する必然でもあつた。と同時に、特に記しておきたいのは、『夏の花』が「長い間脅かされてゐたものが、遂に來たるべきものが、來た」のだ、という認識で、感情論に傾斜す

ることもなく、また報復の論理に支配されることもなく、「すべて人間のなものは抹殺され」、「精密巧緻な方法で実現された新地獄」として八月六日を客観的に描くことを可能にしたのは、戦時下、時代の空気を冷靜に認識し、けつして時代におもねることがなかつた原民喜という文学者の精神であつた、ということである。

原民喜が「今、ふと己れが生きてゐることと、その意味が、はつと私を弾いた。／＼このことを書きのこさねばならない／＼は改行を示す。以下同じ」というとき、そこにあるのは、原爆被爆という惨劇の中で生き残つた人、社会化された「私」であつた。原民喜にとつて八月六日は、それまでかれが発表した抒情的作品群―それこそ原民喜の類まれな文学的資質でもあつたのだが―を無化しかねない出来事、悲惨でもあつたのだ。「死と愛と孤独」（昭和24・4）で原民喜じしん、「原子爆弾の悲劇のなかに生き残つた私は、その時から私も、私の文学も、何ものかに激しく弾き出された。この眼で視た生々しい光景こそは死んでも描きとめておきたかつた」と記すように、『夏の花』が妻貞恵の墓参の場面から始まるのは、象徴的ですからある。そこでは、原民喜は、妻貞恵というひとりの女性に対する鎮魂の歌をうたう詩人から、被爆者たちの鎮魂に残された生を捧げる詩人へと変貌しているのである。

ちなみに、次にあげるのは「鎮魂歌」（昭和24・8）の一節である。『夏の花』で「死んだ方がましさ」とはき棄てるように呟いた兵士について記したものである。

人間の足。僕はあるとき傷ついた兵隊を肩に支へて歩いた。兵

隊の足はもう一步も歩けないから捨てて行つてくれと僕に訴へた。疲れはてた朝だった。橋の上を生存者のリヤカーがいくつも威勢よく通つてゐた。世の中にまだ朝が存在してゐるのを僕は知つた。僕は兵隊をそこに残して歩いて行つた。僕の足。突然頭上に暗黒が滑り墜ちた瞬間、僕の足はよろめきながら、僕を支へてくれた。僕の足。僕の足。僕のこの足。恐ろしい日々だった。滅茶苦茶の時だった。僕の足は火の上を走り回つた。水際を走りまはつた。悲しい路を歩きつづけた。ひだるい長い路を歩きつづけた。真暗な長いひだるい悲しい夜の路を歩きとほした。生きるために歩きつづけた。生きてゆくことができるのかしらと僕は星空にむかつて訊ねてみた。自分のために生きるな、死んだ人たちの嘆きのためだけに生きよ。僕を生かしておいてくれるのはお前たちの嘆きだ。僕を歩かせてゆくのも死んだ人たちの嘆きだ。

たしかに、ここで記述されているのは「お前」ではなく「お前たち」なのである。「忘れがたみ」で「おまへが椅子のうへで頬を火照らしてゐるとき、海の近いこの土地の、わるい湿気や、南風や、苛立たしい光線などが皮膚のすみずみに甦り、何もかも堪へ忍ばねばならぬ間のかなしさがむねをふさぎ。／おまへの嘆き、歎び、背の恰好をのこしてゐる椅子」と記された「おまへの嘆き」はここでは「お前たちの嘆き」へと転化されているのである。

こうしてたどつてくると、短編連作「美しき死の岸に」に記述された一九三九（昭和一四）年九月一〇日、一九四一（昭和一六）年二月八日は、原民喜にとって特別のものであったということがいっそう

鮮明になる。一九三九年九月一〇日は、一九四四（昭和一九）年九月二八日の妻貞恵の死によつて閉じられるアジア太平洋戦時下の一文学者とその妻との闘病生活、いわば個人史短編連作「美しき死の岸に」の発端の日であり、一九四一年二月八日は、いうまでもなく、原民喜にとつて、一九四五（昭和二〇）年八月六日の被爆へと向かう、歴史的証言『夏の花』の悲惨の始まりの日であつたのである。

（いわさき ふみと、広島大学教育学研究科名誉教授）